『更級日記』の夢の記述における僧の関わりについての一考察

田嶋知子

（一）

『更級日記』には、多くの夢の記述が残されている。その夢は、十一にわたり書き記されており、日記全体に及んでいる。それは、作者の生涯に深く関わっており、作者自身に多大な影響をもたらしていたと言えよう。しかし、その夢の多くは信仰に関するものであり、それは、夢十一のうち、九にもわたっている。それは、いったいどういうことなのであろうか。そういった疑問から、私は夢と信仰の関わりにおける謎の解明に向けて考察を試みたわけである。

今回の小論は、『更級日記』の夢に描かれる「僧」を中心に考察したものである。僧が夢中で果たした役割のようなものに焦点を置いた時、僧は信仰の諭しを夢告していた。そしてこれから私が指摘するこの僧の信仰の諭しにおける夢告のパターン、図式が、『更級日記』が一見、仏教的な要素を兼ね備えた日記と指摘される所以であることを論じ、さらに晩年記の孝標女の精神性を考察した上で、『更級日記』は、仏教的要素を孕むまでに至らなかったことを明確にしたい。

（二）

ここでまず、『更級日記』に描かれる十一の夢の内容をおさえておきたい。別紙の夢の分類表からも確認されるように、夢十一のうち、夢①、②、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑪の九例が、信仰の諭しと思われる。その九の中で、僧が存在する夢は、四例指摘される。ここでは、夢中において諭した人物について考察していくわけであるが、その前に、『更級日記』成立以前の古代の夢の認識について触れておきたい。その資料として、『古事記』を挙げる。

「己が夢に云はく、天照大神・高木神二柱の神の命以ちて、建御雷神を召して詔りたまはく、『葦原中国は、

いたくさやぎてありなり。我が御子等不平み坐すらし。其の葦原中国は、専ら汝の言向けつる国なり。故、汝建御雷神降るべし』とのりたまひき。爾に答へて白さく、『僕は降らずとも、専ら其の国を平げし横刀有れば、是の刀を降すべし。此の刀を降さむ状は、高倉下の倉の頂を穿ちて、其れより堕し入れむ』。『故、あさめよく汝取り持ちて、天つ神の御子に献れ』とのりたまひき。故、夢の教の如に、旦に己が倉を見れば、信に横刀有りき。故、是の横刀を以ちて献れるにこそ」(1)

この夢は、夢中において神がお告げを下し、人々は、夢告を実行する。これにより夢は神との唯一の出会の場として認識されている。また、夢は現実であることを示しており、夢は古代人にとって、非常に信憑性が高いものであったと言えよう。こういった古代人の夢の認識ではあるが、夢の諭しを『更級日記』の夢において、作者孝標女が重んじるか否かは、ここでは言及しないにしても、この夢中の神の啓示については、『更級日記』における、夢中で仏がお告げを下す、といった図式と類似しているのである。(論文末尾の【資料②】の①に拠る)これらを踏まえた上で『更級日記』における夢中の僧に焦点を置き、論じていきたい。

(三)

先にも述べたように、『更級日記』においては、信仰に関わる夢が大変多く、そこに疑問を抱く。このことについては、様々な研究において指摘されているわけであるが、今回、私は『更級日記』の夢を考察していく中で、一人の人物に注目したいと思う。それが、夢中に現れる「僧」の存在である。この僧が、夢中において与える影響とは、いかなるものであったのであろうか。そこで、まず、『今昔物語集』に描かれる、僧の説話をもとに、当時の僧の置かれていた立場、役割、人々の認識などを確認しておきたい。ここで、『今昔物語集』の中の「行基菩薩学仏法導人語第二」には、

此行基菩薩ハ畿内国ニ四十九所ノ寺ヲ□□□給ヒ、悪キ所ヲバ道ヲ造リ、深キ河ニハ橋ヲ亘シ給ヒケリ。文殊ノ化シテ生給ヘルトナム語リ伝タルトヤ。(2)

といった、行基が橋を架けたという興味深い話が見られる。また、「神名睿実持経者語第三十五」には、このような話もある。

(前略)然レバ、目代睿実ヲ請ズ。睿実君請ニ趣テ、守ノ館ニ行テ、法花経ヲ誦スルニ、未ダ一品ニ不及ザル程ニ、護法病人ニ付テ、屏風ヲ投越シテ、持経者ノ前ニシテ一二百反許打逼テ、投入レツ。其ノ後、病忽ニ止テ、聊ニ苦キ所無シ。

これは、僧が法華経を誦し、忽ち病を治してしまったというものであり、極めて神秘的である。この他にも、法華経読誦により、死人が生き返ったという話や、僧が足の傷をなで

ていたら、忽ち治ってしまった、といった内容のものも記されており、当時の僧は、このような働きにより、天皇をはじめ、人々に厚い信頼と、神秘的かつ驚異的な力を兼ね備えた人物として、崇められていたようである。ここで、平安時代の僧の存在と認識について確認した上で論じていくのは、『更級日記』における僧と夢の関わりについてである。再度、論文末尾の【資料①】の「夢の分類表」によると、次のことが確認される。夢と信仰が関わる夢九例のうち、僧が描かれるのが、夢①、④、⑤、⑥の四例である。そして、この夢を更に、僧の夢のパターンとして、A、僧の夢解き、B、僧の仏教教養への啓示、C、僧の予言、D、作者の前世における僧の夢告、というように細分化し、整合のもとで論じたい。

これから論じていく夢の考察においては、平安時代の漢文日記を手がかりとするものである。その中でも『小右記』『権記』『御堂関白記』『中右記』『台記』には、非常に夢の記述が多く、その夢日記には、見て即時に記録されたと思われる、日付も記されており、平安漢文日記は、平安日記文学の夢における、様々な内実を知る上で、重要な資料ではいかと思われる。この漢文日記に関して指摘される例は極めて少ないが、森田兼吉氏が『小右記』次の記述によって、

●面不知法師来、令申可相逢之由、則令問住寺及其名、是円賢、(不問名字、所称也)、住天台具足坂松下房、又往還常行堂辺、面必有可令申事者、昨今有慎不可会之由相答了、　(正暦四年三月五日)

●前日所来法師今日重来、而其名、円賢者、不相逢、以人云、為申夢想告所参入也者、人々云、以虚夢来告処々、以其事為便者云々、　(同年三月十八日)

●円賢法師重来、以平誉師令問夢躰、所告似虚、不可信用、　(同年三月二十二日)

「このように『あなたのために良い夢告を得た』といって面会を求め、謝礼などを得て生活している法師もいたのであった。[3]」と述べている。この森田氏の見解は、日記文学における「夢」に焦点を置き考察された際に、「夢告」を取り上げ論じたものである。しかしながら今回私は、平安漢文日記における夢中の「僧」に焦点を置き、そして更には、夢における僧の役割を考察し、『更級日記』の夢の一つの解釈として、夢と僧の関わりにおける、信仰の啓示の図式について論じ、日記の信仰性の有無の解明を試みるものである。これら森田氏指摘の漢文日記からも、僧の夢告と称した夢占いが確認されるが、『更級日記』においては夢⑤初瀬代参の僧の夢がそれにあたる。

母一尺の鏡を鋳させて、「え率て参らぬかはりに」とて、僧を出だし立てて、初瀬に詣でさすめり。「三日さぶらひて、この人のあべからむさま、夢に見せ給へ」などいひて、詣でさするなめり。そのほどは、精進せさす。この僧帰りて「『夢をだに見で、まかでなむが本意なき

こと。いかが帰りても申すべき』といみじう額づき、おこなひて、寝たりしかば、御帳のかたより、いみじう気高う、清げにおはする女の、うるはしくさうぞき給へるが、奉りし鏡をひきさげて、『この鏡には書や添ひたりし』と問ひ給へば、かしこまりて、『書もさぶらはざりき。この鏡をなむ奉れと侍りし』と答へ奉れば、『あやしかりけることかな。書添ふべきものを』とて、『この鏡を、こなたに映れる影を見よ。これ見れば、あはれに悲しきぞ』とて、さめざめと泣き給ふを見れば、臥しまろび泣き嘆きたる影映れり。『この影を見れば、いみじう悲しな。これ見よ。』とて、いまかたつかたに映れる影を見せ給へば、御簾ども青やかに、几帳押し出でたる下より、いろいろの衣こぼれ出で、梅・桜咲きたるに、鶯木伝ひ鳴きたるを見せて、『これ見るはうれしな』とのたまふとなむ見えし」と語るなり。(4)

この夢は、僧が夢を見て、孝標女の将来を占ったというものであるから、論文末尾の【資料①】における僧の夢の分類にしたがって、A、僧の夢解き、とする。この夢は夢中の言ではないが、僧の役割の一つの夢占いの確認に留めておく。

次に、夢中の僧の存在が指摘される夢①を見ていこう。

「いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、『法華経五の巻を疾く習へ』といふ」

ここでの夢の分類としては、B、僧の仏教教養への啓示である。ここでの「法華経五の巻」は提婆達多品第十二(5)を指し、これは、竜女の女人成仏が描かれたものである。夢中で「法華経五の巻」を習うように啓示した僧の存在を考えると、この夢は僧が、女性である作者の女人成仏への導き、橋渡しといった夢告と捉えられる。であるなら、この僧のお告げは、仏から受けた啓示を僧が、作者に女人成仏といった意味合いにおいて、信仰の諭しを行ったと考えられよう。そして、信仰の啓示において、僧が、仏と作者との媒介的な役割を担ったとは考えられないであろうか。このような、法華経読誦の啓示の夢は『今昔物語集』の「天王別当道命阿闍梨語第三十六」の中でも、やはり、僧を通じて語られている。

死テ後ニ、得意ト有ケル人、「阿闍梨ハ何ナル所ニカ生レタラム」ト思フ程ニ、其ノ人ノ夢ニ、一ノ大ナル池ノ辺ニ至ルニ、蓮盛ニ開テ池ニ満タリ。池ノ中ニ経ヲ誦スル音聞ユ。吉ク聞ケバ、故道命阿闍梨ノ音ニテ有リ。其ノ時ニ怪ムデ、車ヨリ下テ池ノ中ヲ見レバ、彼ノ阿闍梨手ニ経ヲ捲テ、口ニ経ヲ誦シテ、船ニ乗テ来タリ。其ノ音生タリシ時ニハ十倍セリ。語テ云ク、「我レ生タリシ時、三業ヲ不調ズ、五戒ヲ不持ズシテ、心ニ任セテ罪ヲ造リキ。就中ニ、天王寺ノ別当ト有シ間ニ自然ラ寺物ヲ犯用シキ。其ノ罪ニ依テ、浄土ニ生ル、事ヲバ不得ズト云ヘドモ、法花経ヲ読奉リシ其ノ力ニ依テ、三悪道ニ不堕ズシテ、此ノ池ニ住テ法花経ヲ読奉ル。更ニ苦無シ。

この話の内容は道命阿闍梨が生前、罪を犯したが、「法華経読誦」によって極楽往生をとげたことを知人に夢中において告げたものである。ここからも「法華経読誦」が、仏の諭しであり、僧もやはり法華経を重んじ読誦を行っていたことは明瞭である。そして、そうしたが故に、僧は極楽往生し、そういった僧が知人に諭している。そういったことからも、法華経読誦の重要性を知り得る僧が夢中において法華経読誦を啓示し、信仰の諭しを行うのだ。ここに、仏の諭しと夢を見た者との間に、僧の存在がやはり浮かび上がるのである。また、『中右記』においても、夢中の僧の信仰の夢告といった内容の夢が指摘される。

去夜夢想云、欲參詣八幡之間、途中渡大河、雖有恐渡了、參寶前、萬人多參會、或讀經、或護摩、行諸佛事、予見之行禮拜之次、唱滅罪生善往生極楽之詞、傍有尼公曰、且可祈申現世之事、已夢覺了、此事依爲殊勝所記置也[6]

（大治五年十二月十六日）

この夢は、見た者がやはり夢中で僧の夢告を受けており、僧が勤行し、「滅罪生前往生極楽」と、現世のことも祈りなさい、と告げるといった内容のものである。このように、「滅罪生前往生極楽」と一身に唱え、仏門に専心すれば極楽往生をとげるといったことを提示する。つまりこの夢においても、夢中において、極楽往生をとげるための信仰の諭しを行なっている僧の介在が確認される。これらのことを踏まえ、『更級日記』について考察すると、僧が、「法華経五の巻」を孝標女に啓示した意図は、先の女人成仏、つまりここで指摘される、極楽往生を意味することは明確となるわけであるから、『更級日記』における夢①においても仏と作者の間に僧が介在し、仏門の専心、信仰を諭し、孝標女に仏教的な影響をもたらしていたことは否めないのではなかろうか。そして更に、三つ目の僧の夢、夢④について論じていく。

彼岸のほどにて、いみじう騒がしう、おそろしきまでおぼえて、うちまどろみ入りたるに、「御帳のかたの犬防ぎの内に、青き織物の衣を着て、錦を頭にもかづき、足にもはいたる僧の、別当とおぼしきが寄り来て、『行く先のあはれならむも知らず、さもよしなしごとのみ』と、うちむつかりて、御帳の内に入りぬ」と見ても

ここで、物詣もせず、一切信仰心を持たない孝標女の姿が描かれ、夢中の僧は、「行く先のあはれならむも知らず」と無信仰であり続ける作者の将来の予言を行っている。したがって、ここでの「夢の分類」としては、C、僧の予言、となろう。物語世界に耽溺している作者の現状に対しては、「よしなしごと」と否定している。このことについて、小谷野純一氏は、「物語世界に信仰世界を対置」[7]といった指摘をなされており、こういった構成上において、僧の夢の関わり方としては、物語世界に位置する作者に信仰を重んじなければ、「行く先もあはれ」と言っているわけであり、ここでは、僧

は夢において作者の将来の予言者的な役割を担っているものと思われる。このことに関し、津本信博氏が次のように指摘する。

（前略）夢を託宣と置きかえて、神仏の夢告と称して別当らが礼堂に参籠する人々に実際語りかけていたのではないかと考えられる。作者は夢として日記に記し留めているが、実際は別当などが仏のお告げだと称し、礼堂に参籠し、伏している孝標女に実際に語った話であろう。[8]

この指摘のように、僧が託宣、予言を行い、信仰を作者に諭すといった僧のあり方を確認しておきたい。やはり、結果的に僧は、信仰を怠ってはならないとの諭しである託宣を行い、「行く先もあはれ」と予言し、このようなかたちで夢中において介在し、信仰の諭しを孕んだ夢告を行っていたと判断できよう。ここで先の夢⑤初瀬代参の僧の夢においても、僧が夢を見て孝標女の行く末を判断する夢占いは、仏のお告げを僧が得、それをいわゆる予言者的存在として介在し、占ったと判断できるのではなかろうか。ここで、『小右記』に見られる、次のような夢中の大変興味深い僧の予言が指摘される。

（前略）心譽律師云、近曾夢故大僧正觀修及上臈僧等、云、攝政今年無殊事欤、明年必死、心譽問云、如何乎、答云、依種々善事、強及今年、至明年必死者、夢通虚實、然而奉仕御禱―後略―[9]　（長和五年五月十八日）

これは、僧が夢中で、今年はよいことがあったため、明年は病になり、必ず死ぬ、といった内容を予言したものである。これを踏まえ、『更級日記』を考察していくと、先も述べたように、夢中の僧は、「行く先のあはれならむも知らず」と作者の将来を予言しており、ここでの『小右記』における僧の予言の夢と同質のものと捉えられ、ここにおいても、仏の諭しを得た僧の予言夢と解せよう。そして更に、夢中に僧が現れる、最後の夢、夢⑥について論じていきたい。

聖などすら、前世のことを夢に見るはいとかたかなるを、いとかう、あとはかないやうに、はかばかしからぬ心地に、夢に見るやう、清水の礼堂にゐたれば、別当とおぼしき人、出て来て、「そこは、前の生に、この御寺の僧にてなむありし。仏師にて、仏をいと多く造り奉りし功徳によりて、ありし素姓まさりて人と生まれたるなり。

ここでの夢中の僧の言は、作者が前世、僧であり、仏を造った功徳により、人間に生まれたというものである。この夢は、「夢の分類表」にも示されるように、D、作者の前世における僧の夢告、を意味する。ここで指摘される、「僧が仏像を造った」という話は、『今昔物語集』の「養造地蔵仏師得活人語第二十五」に描かれる。

（前略）汝ヂ其ノ仏師共ヲ養テ、我ガ像ヲ令造タリ。汝ヂ必ズ綵色シテ可供養□。彼ノ檀越ハ更ニ造リ遂ル事

不有ジ。努々、汝ヂ此レヲ可遂シ』ト宣テ、道ヲ教ヘテ返シ遣ス、ト思フ程ニ活レリ」ト語ル。妻子此レヲ聞テ、涙ヲ流シテ悲ビ貴ブ事無限シ。

眼前にこの法師が生前に造った、地蔵菩薩が現れ、その功徳により、専当法師を生き返らせた、といった内容である。ここで『更級日記』の僧の存在を論じてみても、僧は、単に作者に信仰の諭しを告げるに留まってはいないのだ。またここで、小谷野氏は、「別当とおぼしき僧」について、

僧の件は、まさに、〈仏〉の次元から衆生界への顕現として位置づけられるといってよい。[10]

と述べており、僧は現世への橋渡しといった存在であることが理解される。この過程において、僧の存在、役割について、更に言及していきたい。『更級日記』においても、僧であった作者が仏像を造った功徳で人間として生まれた、とあり、ここで確認されることは、僧は作者の前世における夢告を行っているだけではなく、仏を造った作者が前世に存在しているといった内容も提示しているわけである。つまり、仏像を造ることは功徳であり、そういったことは、僧は知っており、ここでは、作者における前世の夢告といった意味合いにおいて、前世の功徳が現世に反映し、仏の救済を得ることができるといったことを孝標女に諭しているのではなかろうか。そうであるならば、『今昔物語集』も踏まえると、ここでは僧が、仏像を造ること＝仏の言をいわゆる託宣者として作者に啓示したものと考えられる。そして、仏像を造る僧の背後には、常に仏の存在があり、そういった僧が、夢中で孝標女に諭す。ここに、仏から僧、僧から作者へといった図式が生まれるのである。（論文末尾の【資料②】②に拠る）その考察を踏まえた上で、一方では僧が仏の化身となって、夢中に現れるといった例も指摘することができる。それは、『日本往生極楽記』の記述に見られる一説である。

聖徳太子は、豊日天皇の第二の子なり。母妃の皇女夢みらく、金色の僧ありて謂ひて曰く、吾救世の願あり。願はくは后の腹に宿らむといふ。妃問はく、誰とかせむといふ。僧曰く、吾は救世菩薩なり。[11]

これは、僧が仏の化身で「救世菩薩」になりかわった例であり、こういった説は、『大日本法華経験記』にも見受けられる。

判官代夢みらく、一の宿徳の賢き聖ありて告げて云はく、我はこれ三井の観音なり。[12]

ここでもやはり、仏の化身の僧が描かれる。先に僧の背後には仏の存在があると指摘したが、僧が仏に成り代わり託宣者のみには留まらず、これまで言及してきたように、僧が「仏」の次元から衆生界への顕現における橋渡し的役割を担っていたからこそ、仏の化身になり得たのであろう。そして先の図式に加え、仏＝僧から夢を見た者へ、といった図式の、二つの解釈が生まれるのである（論文末尾の【資料②】③に

拠る)。

(四)

これまで『更級日記』の夢における「僧」について、論じてきたわけであるが、ここに、私の解釈として前節で指摘した二つの図式が成り立つのである。僧の存在する夢については、A、僧の夢解き、僧が仏の諭しを得、作者に啓示する。B、僧の仏教教養への啓示、僧の作者が極楽往生をとげるために諭す。C、僧の予言、僧が仏から得た作者の行く末の予言。D、作者の前世における僧の夢告、僧が仏から得た、前世の功徳により現世の仏の救済を得ることができるといった託宣が指摘されるわけであるが、それぞれが、仏の信仰の諭し、専心といった意味合いを含み、そこに僧の存在、夢中における役割のようなものを考えたとき、その夢の性格はA、B、C、Dにおいて少々異なった。しかし、B、僧の仏教教養への啓示、においても、「法華経読誦」の仏の諭しを「僧」が受け、作者に伝えている。また、C、僧の予言、に関しても、僧が仏の託宣を受け、それを僧が作者の将来を予言することで、作者に信仰の諭しの啓示を行っている。そしてD、作者の前世における僧の夢告においても、仏像を造るといった功徳(前世の功徳)は、現世において救済を得るといったことを啓示する。やはり、これらの夢にはすべて、仏から信仰の啓示を受けた託宣者として僧が介在することは明瞭である。これらをさらに踏まえると、A、僧の夢解きに関しても、僧の見た夢の内容の真意は問われるが、先に言及したように、僧は夢に仏の夢告を見、語ったものといった解釈が可能であれば、僧は夢中において、信仰の重要性を多分に含んだ諭しを行うばかりでなく、仏からの橋渡し的存在、仏の託宣者になり得たのである。

『更級日記』においては、夢と信仰は密接に関わっており、ここに僧の存在が見出される。漢文日記、『今昔物語集』の夢中の僧を論じていく中で確認し得ることは、仏の諭しを受け、法華経を重んじ、仏教に帰依していた僧であるからこそ、夢中の僧の言は、仏の啓示、託宣者、そして、僧が仏に成り代わり、仏の化身になり得たのであろう。そういった僧であるからこそ、『更級日記』においても、仏の啓示を受けた僧が孝標女に信仰のお告げを下していたことが考えられる。であるから、夢の啓示において、仏と、夢を見る者の間に僧が関わっていたということは、見逃してはならないであろう。そして、このような形で、僧が関わり、仏教的な側面に影響をもたらしていたのであるが故に、『更級日記』の夢がこのように、信仰と関わりを持ち、仏の諭しが多く告げられていることが指摘される所以であろう。しかしながら、ここで忘れてはならないのは、この僧の存在により、『更級日記』は仏教的な側面を帯びたものではないことである。作者自身の晩年の次のような記述を留意しなければならないであろう。

昔より、よしなき物語・歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて、前のたび、「稲荷より賜ふしるしの杉よ」とて、投げ出でられしを、出でしままに稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ、「天照御神を念じ奉れ」と見ゆる夢は、人の御乳母して内裏わたりにあり、帝・后の御陰に隠るべきさまをのみ、夢ときも合はせしかども、そのことは、一つかなはでやみぬ。ただ、「悲しげなり」と見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。かうのみ心に物のかなふかたなうてやみぬる人なれば、功徳もつくらずなどして漂ふ。

この記述から確認されるように、作者は夢中における信仰の諭しに従わなかったことについて後悔の念を抱いているのみであり、夢⑪において、「この夢ばかりぞのちの頼みとしける」と阿弥陀の来迎を夢みるに留まっている。夢の考察において、『更級日記』が仏教的要素を孕んだ日記であるか否かは、この僧の存在が大きく左右しているように思われるのだ。僧の存在により、先に言及したように、『更級日記』に仏教的な影を作者への信仰の諭しといった意味合いにおいて僧が落とし、『更級日記』が仏教的要素含んだ日記として指摘される所以であると思われる。しかしながら、ここに記し置いた夢⑪からも明瞭なように作者自身は晩年に後悔の念を抱きながらも結局のところ、夢告に従い、仏門の専心に至ることはなかった、ということを見失ってはならないであろう。

今回の『更級日記』の夢をめぐる小論は、「僧」に焦点を置き、夢中における役割、存在性を考察した。そういった、信仰の託宣者である僧の介在が、「信仰と夢の深い関わり」といった問題を通して、『更級日記』の仏教的側面が窺われることの疑問の解明に少しでも近づき、さらに、夢にしがみ続けた作者、精神性の本質に迫っていくものとなれば、と思うばかりである。

【注】

(1) 本文引用は、『新編日本古典文学全集』に拠る。

(2) 『今昔物語集』の本文引用は、『新編日本古典文学全集』に拠る。

(3) 森田兼吉「『かげろう』の夢『更級』の夢」『王朝日記の新研究』所収

(4) 『更級日記』の本文引用は、小谷野純一『校注更級日記』にすべて拠る。

(5) この「法華経巻の五」についての提婆達多品第十二については「爾時舎利弗。語龍女言。汝謂不久。得無上道。是事難信。所以者何。女身垢穢。非是法器。云何能得。無上菩提。佛道懸曠。逕無量劫。勤苦積行。具修諸度。然後乃成。又女人身。猶有五障。一者不得。作梵天王。二者帝釋。三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身。云何女身。速得成佛。」とある（岩波文庫『法華経』に拠る。）。

(6) 本文引用は、『増補史料大成』所収に拠る。
(7) 小谷野純一『更級日記全評釈』
(8) 津本信博『更級日記の研究』
(9) 本文引用は、『大日本古記録』所収に拠る。
(10) (6) に同じ。
(11) 『日本往生極楽記』(日本思想大系7『往生傳法華験記』岩波書店所収。)
(12) 『大日本法華経験記』(所収は(11)に同じ。)

【資料①】

●夢の分類表

夢十一のうち、仏の信仰の諭しと思われるものは九例あり、その中で更に僧の夢を細分化し、分類したものである。

番号	夢の内容	夢の分類
夢①	法華経五の巻を早く習うようにと僧に告げられた夢	信仰の諭し B、僧の仏教教養への啓示
夢②	天照大神を念じなさいと、ある人に告げられた夢	信仰の諭し
夢③	作者の姉が見た猫の夢	姉が見た夢
夢④	「よなしごと」を僧に戒められた夢	信仰の諭し C、僧の予言
夢⑤	初瀬代参の僧が見た鏡の夢	信仰の諭し A、僧の夢解き
夢⑥	前世の功徳で人間として生まれたのであると、僧に告げられた夢	信仰の諭し D、作者の前世における僧の夢告
夢⑦	中堂より香を賜ったことを伝えるようにと、人に告げられた夢	信仰の諭し
夢⑧	宮仕えの際には、博士の命婦とよく相談しなさいと、女の人に告げられた夢	信仰の諭し
夢⑨	御堂の方から稲荷より杉を賜ったと告げられた夢	信仰の諭し
夢⑩	宮仕え時代における同僚の夢	仏教的内容は含まれない
夢⑪	阿弥陀来迎の夢	信仰の諭し

【資料②】

〈夢と僧の関わりにおける図式〉

●『古事記』

★神→夢を見る者

①仏→夢を見る者(仏が直接信仰について諭す)

②仏→僧→夢を見る者(仏と夢を見る者の間に僧が介在し、信仰について諭す)

③仏=僧(仏の化身)→夢を見る者(僧が仏の化身となり、夢を見る者へ信仰について諭す)

ここでは、『古事記』における、夢の図式と①、②、③はイコールで示されるものではなく、類似である。今回論じた、僧に関わる夢

以外に考えられる夢の図式が①であって、②、③は夢に僧が関る考察の際に考えられる図式である。

付記

本稿は、二〇〇二年度大東文化大学大学院文学研究科日本文学専攻研究発表会における口頭発表をもとに、加筆修正を加えたものである。席上ご教示を賜りました諸氏はじめ、稿をまとめるにあたってご教示を賜りました小谷野純一先生に深く感謝申し上げる次第である。